

「日本写真保存センター」調査活動報告 (14)

写真フィルムの劣化と包材・土門拳記念館の保存対策

松本 徳彦
(専務理事)

劣化が進む写真フィルム

撮影されてから30年以上経ったフィルムは、保存環境によっては少なからず劣化が起こっている。「日本写真保存センター」で収集調査に伺った、戦前から1960年代に活躍された写真家の多くが使っていたネガホルダーはダイヨット (Dayot) 製のホルダーであった。この中厚表紙 (酸性紙) のホルダーは、グラシン紙製の6コマのフィルムが6本入るタイプのもので、高級品であった。戦後は紙製のものに加え、透明なセロファンやビニール系のものが登場し、画像が透けて見えることからよく使われていた。ホルダーはテーマごとや撮影年ごとに事務書類を納めるファイバー製のトレイや菓子箱、空き缶に入れて保存されていた。

1970年代後半に入って写真美術館の設立が叫ばれ、写真プリントの保存に関心が集まるようになると、アメリカから写真の保存に関する情報と同時に長期保存を目的とした無酸、中性紙の包材の輸入販売が始まった。しかし、撮影フィルムの保存に関しては、酸性紙問題は論じられたが、包材や保存環境については、一部の専門家を除いて写真家全般にまでは情報は伝播、普及していなかった。その最大の理由は、無酸あるいは中性紙の包材の多くが欧米からの輸入品で、販売する業者も少なく、その上価格が高かったことが考えられる。

また、高温多湿のわが国でありながら、保存環境についての適切な情報が少なく、写真家の経験のみが頼りで、フィルムは桐箱あるいは茶箱で保存するのがよいとか、整理に便利な専用の引き出し式のタンスを特注される写真家もあった。このタンスの底板にベニヤなどの合板で作られたものが多く、ホルマリン系の接着剤が問題と指摘されました。さらに、カラーフィルムは透明なビニールあるいはポリエチレンの袋に入れ、密封して埃が入らないようにするのが良いとされたり、スライドについてもプラスチックのスライドホルダーに入れ、ビニール系のシートで覆われた市販のボックスで保存するのが一番とされもした。が、結果的にはいずれの方法も空気の流通を遮り、加水分解した酢酸ガスを閉じ込めて劣化を速めたようである。

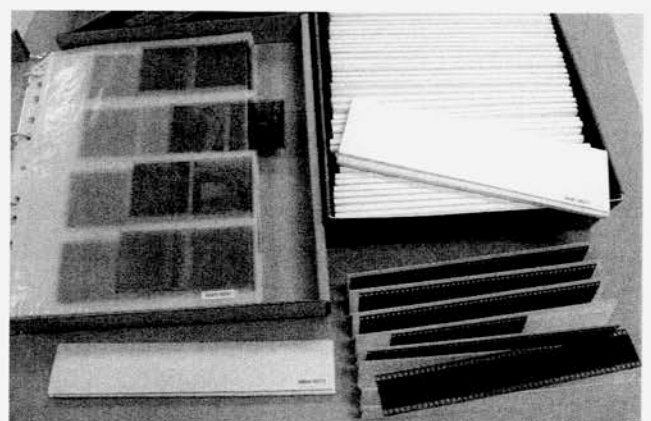
こうした方法でいまなお保存されているフィルムがある方は、可能な限り急いで、フィルムを納めた箱の蓋を開けて点検していただきたい。もし酸っぱい酢酸臭がするようならビネガーシンドロームが発生していると思って間違いない。その場合は、湿度の少ない冬場を利用して、空気を入れ替える。ホルダーや入れ物 (ストレージボックス)

を中性紙のものに取り替える。これだけの方法で、酢酸臭はおさまるが、劣化そのものが修復されるわけではない。大事な作品の写真原板は、なるべくパライタ紙でプリントを作ることを勧める。フィルムをスキニングしてデジタル化すればと思われている方も、まずプリントをして良好な画像を残すのがよい。そこからデジタル化をする。理由は単純で、ストレートなプリントもあるが、多くは焼き込んだり、覆ったりしてプリントが作られているので、作家の意図を再現するにはプリントからデジタルデータを作るほうが良い。さらに、デジタルデータは不安定だが、プリントによる画像は100年近く残っているからである。いずれにしても歴史的文化的に大事な写真を後世に残すことには多くの費用がかかる。しかし、いまやっておかないと貴重な記録を失うことになる。

写真学会によれば、室温24℃、相対湿度50%で約30年経つと劣化が始まり、30℃、50%だと15~20年。35℃、70%以上になると6~7年でビネガーシンドロームが発生すると言われている。ちなみに保存センターが文化庁から借り受けている、東京国立近代美術館の相模原フィルムセンターの保存庫では、室温10℃、相対湿度40%で24時間空調制御している。収集したフィルムはすべて、酸性度試験薬A-Dストリップでテストをし、レベル0.5以下のものだけを、中性紙の包材に入れ替えて収蔵している。

フィルムを長期に保存するための推奨できる有効な方法は次の通りです。

- 1、保存する場所は1階よりは2階以上が望ましい。
- 2、北側や西側の壁、窓に接していない場所。結露や西日の当たらないところ。



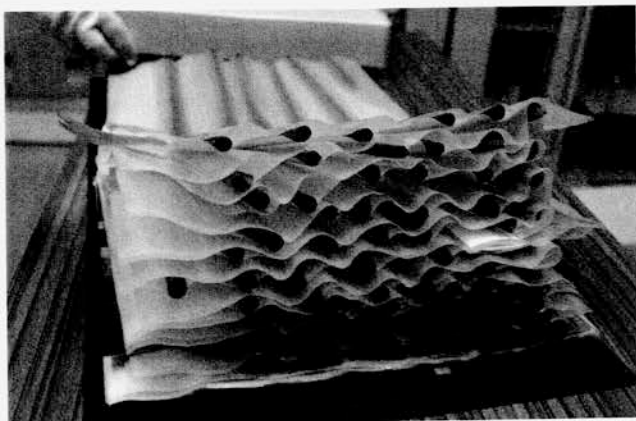
中性紙の包材。(左がシート状のもの。右が蛇ばら式)

- 3、一般家庭での保存は、室温20℃以下、湿度50%以下を目安にする。(かなりきびしいが)
- 4、ネガホルダー、収納箱は、中性紙の包材に取り替える。ゆとりをもった収納。
- 5、カラーフィルムは、中性紙またはポリプロピレンの袋に入れ封をしない。
- 6、ときどきフィルムを保存箱から取り出し、乾燥した空気で換気する。(冬期がよい)
- 7、大事な画像はパライタ紙にプリントしておく。
- 8、デジタル化は良好なプリントからスキャニングあるいは撮影(コピー)する。

取り急ぎ、乾燥した風を通し、包材を中性紙にするだけで、劣化を遅らせることになる。

土門拳氏の写真原板にビネガーシンドローム

昨年11月、土門拳記念館から「貴重なネガにビネガーシンドロームが発生しているのが見つかった。」と連絡があった。対処法並びに修復の可能性について検討したいので来館いただきたいとの要請がある。同月28,29日、酒田市の記念館を松本と調査員の中川裕美が訪ね、現状を検分することにした。館長室で専務理事兼事務局長の小松原和夫氏と総務主査兼総務係長の大竹佳代子さんから現状説明を受ける。館が所蔵している写真原板は、4×5インチの大判から6×6判、35ミリ判までのカラーとモノクロのフィルムと乾板数が約7~10万点と膨大である。ネガ収蔵庫は15℃、45%で管理されているが、一部は作品と同じ収蔵庫(20℃、50%)でも扱っているという。写真原板を納めたガラス戸棚から青色の表紙のネガファイルを取り出す。ハクバ製のネガファイルは6コマのスリーブをシート状にしたバインダー式のファイルで、半透明のポリエチレン系の包材に納められていた。フィルムはわずかながら酢酸臭を発生し、丸く棒状に巻き込んだ状態だった。これまでの調査でも丸まった状態のフィルムはあったので、これは一刻も早く中性紙の包材に交換する必要があると判断した。と同時に、劣化が起こっているフィルムシートと起こっていないフィルムを分離して、別々の箱で保存することを提案する。劣化していな



シート状のネガホルダーで、フィルムが巻き込んだもの。

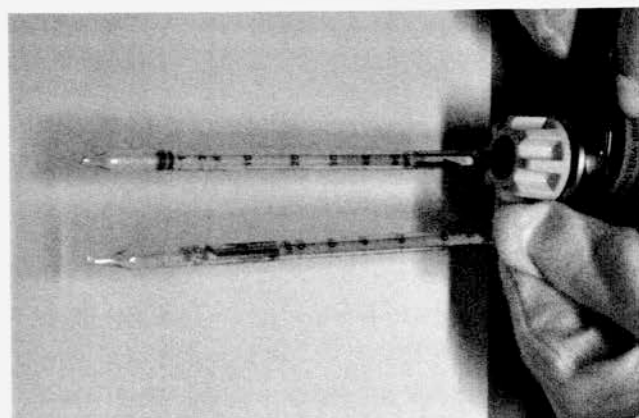
い良好なフィルムの貴重な画像については、パライタ紙によるプリントを製作するようお願いした。(写真参照)

次いで、持参したガス検知管で「室生寺」のフィルムが納まっているネガホルダーを計測したところ、ガス濃度が3.6ppmあった。この値はA-Dストリップのレベル15以上と最悪の状態であったので、保存箱の蓋を開け放ちガスを放散させる。ハクバ製のファイルに納まっているフィルムは急いで通気し、中性紙の包材に入れ替えることをお願いした。大判のカラーポジフィルムを納めたビニール張りの箱についても、中性紙の保存箱に入れ替えることを勧める。

池田真魚館長によれば、20年ほど前に、戦前から使ってきた紙製のホルダーの一部から酢酸臭がするものがあり、中には溶けだしたものや粉状に破壊されたものもあったので破棄したものもあった。当時古いホルダーは紙製で、酸による劣化が伝えられていたので、紙製からハクバのものが良いと推薦される方があり選んだという。館ではすでに大判のフィルムのデジタル化は行っているが、モノクロについては一部のみでこれからという。そこで、小型フィルムからのデジタル化は大変であり、作品に近い画像を得るにはプリントしたものからスキャニングするほうが良いことを伝えた。

また、棒状に丸まったフィルムについては、同様な状態の映画フィルムの修復経験がある京都の吉岡映像株に依頼して、数本のスリーブを平らにする作業を行ったという。修復されたフィルムを見たところ、一応平らにはなっているが、保証期間は1カ月程度(約2,000円)で、また丸まってしまう可能性があると言われたという。

土門氏が1950年代に撮影された「室生寺」「ヒロシマ」「筑豊の子どもたち」などは歴史的文化的に貴重な作品群で、文化的な遺産でもある。これらの写真原板が失われることが無いように、急いで長期保存対策を進める必要があると提言する。同様な劣化は各地の美術館や資料館、公文書館でも起こっているところから、写真原板を如何に保存するかに関心が高まっている。写真が時代の事象を記憶以上に捉えていることが認識され、その原板を収集保存し、利活用について調査研究している「日本写真保存センター」の活動に多くの眼が注がれている。どうぞご協力とご支援をお願いしたい。



ガス検知管での結果。下が高濃度を示している。